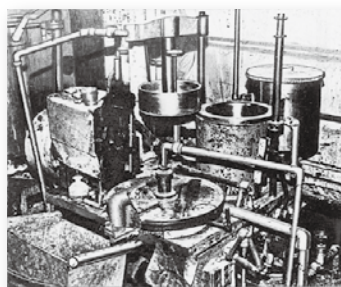


おおさか  
KEY  
ワード  
第54回



夏期用クレパス



クレパス製造機械の第一号機

宣伝カーもカラフル  
大阪が誇るサクラクレパスの歴史が…

写真：株式会社サクラクレパス提供

オオサカの街色を考えると…  
RED and BLACK もありかな

大貫妙子の「色彩都市」という曲が、むかし大阪某民放で土曜の朝番組のテーマに用いられていた。京阪神の都市を色彩にたとえたらどうだろう。京都は寺院のムラサキや神社の朱色、神戸は港のマリンブルーや六甲山の緑色といった感じだろうか。定番そのものの答で発想にひねりが足りない気がする。問題は大阪だろう。恐らく刺激的な色彩がイメージされ、ショッキングピンクやら派手派手しい色が連想されるのだろう。原色の多用にスペクトルが錯綜し、ごたごた重なりあって混色し、微妙な色調に仕上がる気もする。

そこで冷静に周りを見回すわけだが、大阪は、昔から様々な絵の具や塗料を商う産業都市であった。それこそ“色彩の都”なのである。江戸時代から大阪には問屋が集まって同業種の組合を形成していたが、染料や絵の具などを扱う店も多く、近代には現在に暖簾がつづく大手の画材や塗料メーカーが登場する。

油彩画を描いた人なら誰もが知るのがホルベイン画材(大阪市中央区)である。社名はルネッサンスのドイツの大画家ホルベイン(HOLBEIN)に由来する。パリ万博が開催された明治33(1900)年、前身の吉村商店が中之島に創業し、高価な輸入の絵の具とは別に、国産の絵の具を製造して油彩画の普及に尽くしたのである。大阪の洋画家・小出楯重の学生時代の絵日記に、船で中之島に行ったことが記されているが、これも絵の具を買いに向かったのかもしれない。

また、これも学生時代からお世話になったのが、サクラクレパス(大阪市中央区)である。大正10(1921)年に日本クレイヨン商会として設立され、同年に桜クレイヨン商会と改称、大正14(1925)年に、クレヨンの使いやすさとパステルの美しい発色をそなえた「クレパス」を開発し商標登録する。現在でも図画教育の普及に尽力

して様々なイベントを開催するほか、平成3(1991)年には創業70周年記念として森ノ宮に「サクラアートミュージアム」を開館させた。クレパス画のコレクション約400点を含む近代日本の絵画コレクション約800点を所蔵している。

一方、建築や船舶に塗るペンキなど塗料の製造販売も大阪で栄えた産業分野である。塗料は対象物の保護・美装が目的で、色彩は二義的な問題かもしれないが、業界トップを争う関西ペイント(大阪市中央区)、日本ペイント(大阪市北区)、ロックペイント(西淀川区)などの大手メーカーが大阪に本社を置いており、やはり大阪は“色彩の都”であったとしたい気がする。

日本ペイントは、わが国初の洋式塗料の生産工場とされる明治14(1881)年設立の光明社が前身で、明治31(1898)年に日本ペイントへ改称した。本社ビルにある「日本ペイント歴史館」では日本塗料史を語る貴重な資料が一般公開されている。なかでも創業時期の「塗り板見本衝立」は、東京上野にある国立科学博物館の「重要科学技術史資料(未来技術遺産)」に登録された、日本最古の色見本である。色調は地味だが、海水などによる劣化から船を守るなどの塗料の見本で、富国強兵、殖産興業に邁進した日本近代を象徴する。

話を最初の都市の色彩イメージに戻せば、それでは大阪を象徴するにふさわしい色彩は何色だろうか。「こてこての大阪でっせ」といった調子でケバケバしい色調になるのがどうも嫌である。今年は大坂夏の陣400年なので真田幸村の赤備と、道頓堀開鑿400年にちなんで戎橋界隈を舞台とした映画「ブラック・レイン」の黒はどうか。レッド・アンド・ブラック…ずっしりと重厚な都市イメージになると思うが、いかに。